2022 年度　教員の自己点検・自己評価報告書

所属学部　学科	職位	氏　　名
人間健康学部 人間健康学科	教授	橘 廣
最終学歴	学　位	専門分野
京都大学大学院教育学研究科博士後期課程 単位取得満期退学	教育学修士	教育心理学 発達神経心理学

Ⅰ　教育活動

○目標・計画

（目標）

脳の発達をふまえた効果的な教育、心身の健康に関わる知識・技能を身につけた指導者の養成、建学の精神「真に信頼して事を任せうる人格の育成」を基盤とした社会から信頼される全人格的な教育を目標とする。また学生一人ひとりの可能性の芽を大切に育て、潜在的な才能や能力を引き出す教育を目標とする。

（計画）

学生の主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業を積極的に行う。難解な理論も楽しみながら理解し、日常生活に効果的に活かせるよう授業を工夫していきたい。また授業評価アンケートの結果をふまえ「わかりやすい授業」をこころがけたい。基本的な事柄を発展させ、創造性を育む授業を行う。演習では、一人ひとりの学生に真摯に向き合い、成長が実感できるよう支援する。心理・教育に関する研究を中心に調査・実験・研究発表を行う中で、プレゼンテーション能力やコミュニケーション能力を高められるよう教育支援をする。

○担当科目（前期・後期）

（前期）

教育心理学（教育・学校心理学）a、教育心理学（教育・学校心理学）b、発達心理学、心理学実験Ⅰa、心理学実験Ⅰb、総合演習Ⅰ、専門演習Ⅲ

（後期）

学習・言語心理学、心理学実験Ⅱ、神経・生理心理学、総合演習Ⅱ、専門演習Ⅳ、教職実践演習（中・高）、発達心理学ｂ

○教育方法の実践

2022 年度の担当科目は、感染症対策を行いながら、すべて対面授業を行うことができた。授業では受講者の関心や理解度を高めるため、パワーポイント資料、ＤＶＤ教材、キャラクターを使用した小道具などの教材を積極的に導入した。どの科目も授業で使用した毎回のパワーポイント資料は Teams にファイルを保存し、教材・資料がいつでも閲覧可能で授業内容を確認できるようにした。また体験型学習（心理検査・調査・観察・実験の基礎を講義により学習したうえで、グループで研究計画、実験や調査研究の実施、データ分析、研究報告書作成）の導入、次回講義内容についてのレポートによる動機づけと授業設計によって、教育効果をあげることができた。
アクティブ・ラーニング手法を取り入れた授業を積極的に行うようこころがけた。演習では、心理・教育に関する研究を中心に調査・実験・研究発表を行う中で、プレゼンテーション能力やコミュニケーション能力を高められるよう教育支援をした。また教員採用試験や就職活動に必要な

筆記試験や面接試験対策指導、ピアヘルパー資格認定試験対策も希望者に行った。

○作成した教科書・教材

「発達心理学」の参考書として、『子どもの手指活動と発達』（単著、三恵社）を作成した。またすべての担当科目において、講義内容の理解を促し関心をもって受講できるような情報を取り入れ、まとめた補助教材の紙媒体の資料は毎回の授業で配布し、パワーポイント資料は Teams にファイルを保存した。

授業担当科目とはならないが、2023 年度人間健康学部専門科目/基礎科目（必修）となる「人間健康学」のテキスト『人間健康学』（唯学書房）の第 14 章を執筆した。

○自己評価

学生の授業に対する関心や理解度を高めるために、積極的にさまざまな工夫をし、当初の目標・計画については、概ね目標を達成することができた。授業評価アンケート結果については、コロナ禍で対面授業が難しく、多くがメディア授業となった 2020 年度と 2021 年度に比較し、全体的に高評価となった。コロナ禍でのメディア授業をわかりやすくするために、資料を時間をかけて作成し、内容を充実できたことも活かされたと考えられる。また今年度はどの授業も各回のパワーポイント資料を Teams に保存し、授業中だけでなくいつでも授業内容を確認できるようにしたことが、これまで以上に高評価が得られた科目が多くみられたことにつながったのではないかと考えられる。受講者の多い科目の対面授業では、これまで、授業内容が理解できずに興味を持てない学生と、とても楽しい授業・これからの生活に役立つ授業と授業評価アンケートに記載し高評価をした学生との二極化が顕著であったが、具体例を多く示し、イラストを用いたりクイズ形式にして説明し、体験学習を行い、できるだけわかりやすく能動的な学習ができるよう努力したことで、今年度は効果があったと思われる。コロナ禍以前の対面授業で時々問題となっていた私語についても、今年度は問題となることは全くなかった。

Ⅱ　研究活動

○研究課題

長期的課題　「脳の発達をふまえた教育及び脳の活性化：　前頭前野の発達を促す教育」

短期的課題　「前頭前野の活性化に関連する手指の遊びの検討」

○目標・計画

（目標）

他者の気持ちを思いやったり、感情や行動をコントロールしたり、意思決定を行うような、人間ならではの高次な思考活動に関係するのが、前頭前野である。前頭前野の機能に焦点をあてながら、問題行動を予防し、個人のもつ能力を十分に活かすためにはどのような教育が必要なのかを、発達神経心理学的アプローチにより検討することを目標とする。

（計画）

何かを創りだすことを目的に、他者とコミュニケーションをとりながら、手指を使った操作活動をすることが、前頭前野を活性化させ発達させるために効率のよい方法であることが、最近の脳科学研究により認められている。能動的創造的な手指の操作活動を中心に、操作性の高さと、脳の機能分化、一側化の程度との関係について、光イメージング脳機能測定装置で計測した前頭前野の血液量を検討する。また手指操作において、どのような要因が前頭前野の賦活に関係して

いるかを検討し、これまでの研究をまとめる。研究成果については、学術論文として公刊するなど、広く社会に情報発信する。

○2015 年 4 月から 2023 年 3 月の研究業績（特許等を含む）

（著書）

・橘廣「心と体の健康を支える「学習」」（第 14 章）　『人間健康学』
西尾敦史・大勝志津穂・尚爾華編著、唯学書房、2023 年 2 月、159-168 頁.

・橘廣『子どもの手指活動と発達』三恵社、2019 年 3 月、152 頁

（学術論文）

・橘廣「ペグボード課題における手指の巧緻性と前頭前野の活動」『東邦学誌』第 47 巻、第 2 号、2018 年 12 月、109-117 頁

・橘廣・長谷川望・小島正憲「「教職実践演習」を中心とした教職科目の検討：アクティブ・ラーニングの視点から」『東邦学誌』第 46 巻、第 1 号、2017 年 6 月、103-118 頁

・橘廣「手指の巧緻性と機能的左右非対称性」『東邦学誌』第 44 巻、第 1 号、2015 年 6 月、101-109 頁

（学会発表）

・橘廣「乳児の手指活動と前頭前野の活動―近赤外線分光法を用いた検討―」日本保育学会第 72 回大会、大妻女子大学、2019 年 5 月、日本保育学会発表論文集、P-1295-1296 頁

・橘廣・橘春菜「乳児の手指活動における機能的左右非対称性と前頭前野の活動―近赤外線分光法を用いた検討―」日本発達心理学会第 30 回大会、早稲田大学、2019 年 3 月、日本発達心理学会第 30 回大会発表論文集、183 頁

・橘廣「手指活動における操作性の高さと前頭前野の活動―近赤外線分光法を用いた検討―」日本教育心理学会第 59 回総会、名古屋国際会議場、2017 年 10 月、日本教育心理学会第 59 回総会発表論文集、191 頁

・第 31 回国際心理学会議（ICP2016）、日本心理学会第 80 回大会　研究発表　2016 年 7 月　Tachibana Hiro　Relationship between functional asymmetry in manual activity and the level of manipulation ： A NIRS study in pegboard performance, The 31st International Congress of Psychology, July 24-29, 2016, Yokohama, Japan, PACIFICO Yokohama

（特許）

なし

（その他）

・橘廣「前頭前野の活性化に関連する手指の遊びの検討」科学研究費助成事業『研究成果報告書』、2019 年

○科学研究費補助金等への申請状況、交付状況（学内外）

・平成 27～30（2015～2018）年度　科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金）
基盤研究Ｃ（独立行政法人日本学術振興会）
研究課題名：「前頭前野の活性化に関連する手指の遊びの検討」
研究代表者：橘廣
交付総額：4,550,000 円

○所属学会

日本心理学会、日本教育心理学会、日本発達心理学会、日本赤ちゃん学会、日本保育学会

○自己評価

2022 年度もコロナ禍の影響で、脳活動の計測等の実験を実施するうえでの制約も多く、実験研究は十分に行えなかった。昨年度からの幼児の行動観察による研究は、玩具開発のために情報提供できた。また、これまでの研究や授業を基に、テキスト『人間健康学』の分担執筆は行うことができた。今後の課題として、「乳幼児の手指活動における機能的左右非対称性」に関わるこれまでの研究をまとめられるよう努力したい。

Ⅲ　大学運営

○目標・計画

（目標）

中高教職課程部会副部会長、人権問題・個人情報管理委員会委員として、部会及び委員会に積極的に関与し、大学運営に貢献する。また総合演習担当として、2 年生全体の演習活動の運営に貢献する。

（計画）

中高教職課程部会では、中高教職課程全般にわたり、介護等体験・教育実習の支援、文科省実地視察の準備、教員採用試験対策強化、教職課程登録者の履修単位に関する指導を行うなど、積極的に活動し大学運営に貢献する。人権問題・個人情報管理委員会では、個人情報管理体制に関わる業務などに貢献する。また総合演習担当として、新型コロナウイルス感染拡大により学生生活に大きな影響を受けている 2 年生の活動支援企画などに貢献する。

○学内委員等

中高教職課程部会、人権問題・個人情報管理委員会

○自己評価

中高教職課程部会では副部会長として、学外実習の支援など、中高教職課程運営全般に関わる業務に貢献した。また教職課程学生の教員採用試験対策を含む教育活動支援などを行った。人権問題・個人情報管理委員会では、個人情報管理体制に関わる業務などに貢献した。総合演習担当として、入学時からの感染症拡大などにより、大学に仲間がいない・相談できる友人がいないなど、学生生活に影響を受けている学生に、支援を行った。

Ⅳ　社会貢献

○目標・計画

（目標）

地域・産学連携活動の知育玩具プロジェクトを通して、地域社会への貢献に協力する。

（計画）

知育玩具「ジナゾル」に関して、経営学、幼児教育学、神経発達心理学、脳神経科学の多側面から、産学連携での共同研究を展開し、「ジナゾル」の普及に協力する。加えて、前頭前野の発達を促す玩具の研究成果の具現化を目指し、社会への貢献につなげたい。

○学会活動等

特になし

○地域連携・社会貢献等

愛知県単位互換制度による前期科目「発達心理学」担当

○自己評価

愛知県単位互換制度の講師を担当し、地域社会に貢献した。また知育玩具「ジナゾル」に関して、神経発達心理学、脳神経科学の側面から、地域・産学連携活動の知育玩具プロジェクトを通して、「ジナゾル」の普及に協力することができた。今後も前頭前野の発達を促す玩具の研究成果の具現化を目指し、社会への貢献につなげたい。

Ⅴ　その他の特記事項（学外研究、受賞歴、国際学術交流、自己研鑽等）

学会や研修会に参加し、得られた最新の情報を教育や研究活動に活かしたい。また実験や調査を行った研究成果を社会への貢献につなげることができるよう努力したい。

Ⅵ　総括

定年退職となるが、教育活動、研究活動、大学運営、社会貢献に関して、概ね目標を達成することができたのではないかと思われる。今後も「前頭前野の活性化に関連する手指の遊びの検討」の研究課題を継続しながら、研究対象を広げ、子どもから高齢者までを対象として、手指操作活動を中心とした前頭前野の活性化について研究成果が出るよう努力したい。また研究成果を生かし玩具開発への貢献や、これまでの研究成果をまとめて公表できればと思う。

以　上